

男性「ヒステリー」患者供覧

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38327

ルニモ困ルベシ、然レドモ之レ亦斯カル作業ノ進行上避ケ得可カラザル件ニ屬ス

結論

一、呼吸器傳染病者殊ニ肺百斯篤患者ニ對シ覆口物ヲ施スハ病芽ノ飛散ヲ抑壓又ハ減削シ得ルコト明カナリ隨テ治療乃至檢診又ハ看護ニ從事スル者ハ之ガ爲メニ傳染ノ危險ヲ避ケルコトヲ得

一、此場合ニ於テノ覆口物トシテ綿紗ヲ用フルトキハ乾性ノモノハ能ク此目的ニ副ヒ得ヘシ

一、濕性綿紗ノ薄層ハ此場合ニ(三枚以下ヲ重ネテ使用スルトキ)ノ如キ(危險ヲ防止スル能ハザル)ノ虞レアリ

一、綿紗以外ノ布巾ヲ此場合ニ使用スルトモ猶叙上ノ消息ヲ推察シ以テ實踐上誤リナカラント信セラル

終ニ茲ニ恩師北里博士ニ敬意ヲ表シ奉天鼠疫研究會期中柴山博士カ列國委員ニ本試験ノ經過概略ヲ紹介セラレ併セテ多忙ナル公務中ニ於テ親シク此報告ヲ校閲シ給ハリタルヲ謹謝ス

●男性「ヒステリー」患者供覽

若杉病院 寺尾秀三 (醫學卒業)

「ヒステリー」ハ中樞神經症即チ自個ガ病氣デアルト云フ、想像ニ基因スルモノデアリマシテ、恐ラクハ大脳皮質中ニ於ケル機能障礙ナラント稱セ

ラレテ居リマス、乍併解剖的變化ニ至ツテハ今日猶ホ不明ニ屬スルノミナラズ、疾病ノ本態ニ就イテモ神經病理學中最モ不明ナルモノ、一ツデアリマス、本病ニ就テ「リテラツール」ヲ繼述スルハ徒ラニ諸君ヲ煩ハス嫌ヒアルヲ以テ余ハ單簡ニ大要ヲ述ベント思ヒマス、希臘竝ニ羅馬時代ニ於テハ「ヒポクラテス」(Hippocrates 377. v. Chr.)「プラトン」(Platon 348. v. Chr.)「ツェルズス」(Celsus) 氏等ハ本病ハ子宮ノ疾病ニシテ情慾ヲ満足セシメンガ爲メニ子宮ノ動搖ヨリ來ルモノナリトノ説ヲ唱ヘシガ、此ノ説ハ既ニガハヌス(Galenus 164. n. Chr.)時代ニ於テ破壞セラレタリ、然レドモ病的作用ハ生殖器區域ニ於テ其ノ原因ヲ有スルモノナラントノ考ハ近時ニ至ル迄テ勢力ヲ有セリ、例ヘバ「ルイエール」ウエー「ローヤ」(Loyer, Villernay)「ロンベルグ」(Homburg) 等ハ專ラ此ノ説ヲ主張セリ、殊ニ「ルイエール」ウエー「ローマイ」ハ最モ屢々來ル所ノ原因トシテ情愛ノ不滿、之ニ關スル苦悶竝ニ月經障礙等ヲ以テセリ、又タ「ロンベルグ」ハ生殖器ノ刺戟ニ依テ來ル處ノ反射の神經症ナリト云ヘリ、ウエー「ウィリス」(Willis 1657)ハ十七世紀ニ於テ既ニ本病ノ病竈ハ大脳中ニ在ルコトヲ主張セリ、又「レポア」(Lepois 1618)モ既ニ同世紀ニ於テ男性「ヒステリー」(Hysterie masculine)ヲ記載シ、又稍々同時代ニ於ケル「シットナム」(Sydenham 1681)ハ本病ニツキ非常ノ効驗アル人ニシテ、「ヒステリー」ハ神經系ノ疾患ナリト説キ且ツ附言シテ曰ク「ヒステリー」ハ一種ノ幽靈的疾患ニシテ種々ノ形狀ヲ現ハシ又タ間斷ナク其ノ色ヲ變ズルコト七面鳥ノ如ク萬般ノ疾病ヲ擬似スルモノナリト主張セリ、又タ同氏ハ其ノ當時「ヒステリー」ハ男子ニモ屢々來タルモノニシテ多數ノ男性「ヒステリー」ハ「ヒポコンデリー」ニ算入シ居ラル、コトヲ記セ

リ、然レドモ此ノ説ハ十九世紀ニ至ルマテ忘却セラレタリ、其ノ後フッフ
エラント (Hufeland 1838) モ同ジク男性「ヒステリー」ヲ唱道シ男子ニ於
ケル「ヒポコンマリー」ハ女子ニ於ケル「ヒステリー」ニ外ナラズト云ヘリ

ブリック (Briquet) ハ其ノ著書 *Traité clinique et thérapeutique de
l'hystérie* (1859) ニ於テ既ニ從來ノ子宮竝ニ生殖器ヲ破壊シ、神經系全
部殊ニ大脳ハ「ヒステリー」ニ最モ關係アルコトヲ唱ヘリ、然レ共未ダ本病
ノ症候ニ至ツテハ十分ニ知悉セラレザリシ爲メ、奇異ニモ有力ナルブリッ
ク氏説モ當時醫界ニ於テ廣ク知ル處トナラザリシハ氏ノ爲メ誠ニ遺憾ト云
フ可シ

シャルコー (Charcot) 氏ハ (1887) 門下生リッシエー (Richter) 氏ト共ニ
Demoniaque dans l'art ナ著シ、當時狐付神付 (Foulebessement) ノ名
義ノ下ニ佛獨ノ寺院ニ於テ盛ニ流行セシ播擲狀態ハ體カニ其ノ本態ニ於
テ「ヒステリー」ニ外ナラザルコトヲ唱ヘ、且ツ催眠術ノ進歩ニ伴ヒ之ヲ應
用シ、竝ニ外傷性「ヒステリー」ヲ研究シタル結果「ヒステリー」ハ大體ニ於
テハ精神の疾患ナリトノ意見ニ到達セリ、然レドモ未ダ「ヒステリー」ハ凡
テノ場合ニ於テ想像 (Vorstellung) ヨリ來タル處ノ疾患ナリト斷言セザ
ルモノ、如シ、又タジャネー (Janet) 氏ノ如キモ本態ニ於テ「ヒステリー」
ハ心理學上説明シ得ルモノナレドモ又屢ク精神作用ニ依テノミ解シ能ハザ
ル場合アリト云ヘリ、故ニシャルコー氏竝ニ其門下生等ノ研究ニ依テ考フ
レバ「ヒステリー」ハ大體ニ於テ精神的作用ヨリ來ルモノナリト云フヲ得レ
ドモ、又タ凡テノ場合即チ一ノ例外ナク心理的作用ヨリ起ルトノ名文ハ
未ダ立證セラレザルモノトス、故ニ極メテ單簡ニ「ヒステリー」ノ定義ヲ下

サント欲セバ大要下ノ如クナルベシ、「ヒステリー」ハ大脳皮質ニ於ケル障
碍ヨリ來タルモノニシテ特ニ精神的作用竝ニ物質的變動トノ間ニ於テ相互
ノ關係支障セラレタル場合ニ來ルモノナラン

原因ニ就テ概言スレバ、本病ハ女子ニ多ク男子ニハ鮮キク言テ俟タズ、
其ノ比例ハ各國ニ於テ差アルガ如シ、日本ニ於テノ統計ハ未ダ知ラズト雖
モ恐クハ從來吾々ノ思考セシヨリ多數ナラン事ハ想像ニ難ラズ、佛國ニ在
リテハマリー (Marie) スック (Sangués) 氏等ノ如キハ少ナクモ巴里ニ於
テハ男性「ヒステリー」ハ女子「ヒステリー」ヲ超過スト云ヘリ、即チマリー
氏ノ統計ハ 5.14 3.35 ニシテスック氏ノ統計ハ 5.9.08 ナリ

獨逸ストラスブルグ大學「クリニツク」ノ如キハ男性「ヒステリー」ハ全
「ヒステリー」患者ノ百分ノ六チ占ムト聞ク、又タ佛國ニ在ツテハ軍隊中ニ
非常ニ多數ヲ占ムルモノナリト云フ、故ニ男性「ヒステリー」ノ數ハ其ノ國
ノ生活狀態、習慣等ニ關スルモノ、如シ、年齡ニ就テハ十五歳ヨリ二十五
歳ニ至ル迄テノ期即チ春機發動期ニ最モ多シト雖モ、又小兒期或ハ月經閉
止期ニ來ルコト多シ、遺傳的關係ハ其ノ他ノ神經症ノ如ク最モ著シ、素因
トシテハ小兒期ヨリ身體及精神の不適應ニ養育セラレシ人ニ多シ、學校ニ
於ケル精神の過勞、名譽心ノ亢進、急性的傳染病竝ニ慢性疾患ノ後ニ來ル
コト多シ、乍併最モ大ナル影響ハ精神の亢奮、悲哀、心勞、業務上ノ失敗
等ナリトス、其ノ他生殖器的ノ刺激ヨリ反射的ニ來タルコトアリ、失戀、
結婚後ノ不幸、莫比其ノ他ノ藥物的ノ中毒、又ハ外傷ヨリ來タルコトアリ、
又傳染性ニ現ハル、コトアリ、或ハ模擬ヨリ來因スルコトアリトス
「ヒステリー」ノ症狀ニ就テ縷述セントスルハ、其ノ人自ラ「ヒステリー」

ニ權ルニ非ラザレバ不可能ト云フモ過言ニ非ラザル可シ、實ニ彼ノシット
 ナーム氏ノ云フ如ク人體ニ於ケル凡テノ疾病症狀ヲ現出シ得レバナリ、乍
 併之ヲ大體ニ括リテ述ブレバ知覺、觸覺、運動、血管運動、分泌營養並ニ
 精神機能ニ於テ障礙ヲ來スニ外ナラズ、而シテ各機能ハ或ハ亢進シ或ハ減
 退乃至消失スルコトアリテ一定セズ、又各種ノ症候ハ單純ニ來ルコト稀
 ニシテ通常ハ種々ノ症狀合併シテ來リ、且ツ此等ノ症狀ハ短時間ニ於テ或
 ハ快復シ或ハ増悪スルヲ常トス、之レ本病ニ於ケル最モ固有ナル徵候ナリ
 トス

其ノ他本病ノ特徵トシテハ、半身症狀、咽頭粘膜ノ知覺麻痺、食道筋ノ
 痙攣ヨリ來ル「ヒステリー」球、網膜ノ知覺麻痺ヨリ來ル處ノ視野狹小等ナ
 リトス、以上ハ歇斯的里ノ原因症狀ニ就キ大畧ヲ述ベタルヲ以テ之レヨリ
 余ガ實驗シタル患者ニツキ述ベントス

患者 H、W、二十四歳、男、新潟縣生、無職業

既往症 遺染の關係、祖父母ハ老衰ヲ以テ死亡、父ハ壯年時代ヨリ神經
 質ニシテ常ニ坐骨神經痛ニ悩ム、母ハ別ニ著患ヲ見ズ今尙生存ス、而シテ
 兩親ハ從兄弟ノ關係ヲ有スト云フ、叔父一人不詳ノ熱性病ニヨリ斃ル、患
 者兄弟八人アリ、長女ハ腦脊髓病ニテ去リ、次女ハ末子ニシテ坐骨神經痛
 及子宮病(月經不順等)ニ苦ムト云フ、長男及次男ハ健存シ、三男ハ二歳ノ
 時不明ノ病死ヲナシ、四男ハ腸結核ニテ斃ル、五男ハ壯年時腦患アリ、六
 男ハ即チ患者ナリ

現病前ノ既往症 患者生來健全、七年ノ頃麻疹ヲ經過シ、種痘ヲ受ケシ
 コト前後三回共ニ善感ス、幼年ヨリ舉動粗暴ニ流レ易ク常ニ常園ヲ脱セシ

行爲ヲ好ム、六歳ノ時遊戲中過チテ弓矢ヲ以テ口内ヨリ咽頭ヲ傷ケタルコ
 トヲ記憶スト云フ、十二歳ノ夏右耳ヲ病ミ切開治療ヲ受ケテ全治ス、其ノ
 手術中醫師ト逆ヒ放尿シタルコト有リシト、眞方虛方謔ツテ頗ル得タリ頗
 ナリ、十四歳ノ春中學ニ入ルモ學績良好ナラズ、上級ノ者ト争フヲ常トシ、
 教師ヨリ訓戒ヲ受クルコト幾度ナルヲ知ラズト

手淫ハ十四、五歳ヨリ盛ンニ行ヒ、屢ク夢精アリト云フ、十八歳ノ時婦
 人ト交際ヲ始メ情愛上ノ關係ヨリ決斷的行爲サヘ致テセシコト幾度アリ、
 此ノ頃ヨリ頭痛、不眠、身體疲勞等ノ神經症現ハレ、屢ク胸内苦悶、心悸
 亢進ヲ招キ、或ル時ハ宴會ノ歸途突然胸内ノ苦悶ヲ覺エ眩暈ヲ來シ、雪中
 數時間路傍ニ佇立歩行不可能ノ事有リシ、二十歳ノ時過リテ碁盤ヲ以テ後
 頭部ヲ打撲シ一時人事不省ニ入りシコトアリト云フ

現病ノ既往症二十一歳ノ頃ヨリ前記症狀増悪シ、意識朦朧、耳鳴、眼華
 閃發、記憶力減退等ヲ加ヘ、且ツ右脚ノ後側或ハ右臀部ニ時々疼痛ヲ來シ、
 時ニ股關節部附近ニ劇痛ヲ發シテ歩行不可能ト爲ルコトアリ、且ツ身體右
 半部ニ知覺ノ變狀ヲ來セリ、昨年十一月母ノ勸メニ從ヒ某醫師ノ治ヲ乞ヒ、
 坐骨神經痛ノ診斷ノ下ニ右側臀部及同側大腿ニ注射十五回及電氣治療ヲ受
 ク、本年二月更ニ他醫師ヨリ十回ノ注射ヲ乞ヒシモ凡テ些ノ効驗ナク、跛
 行依然タリ

患者幼ヨリ兎角我儘ナリシヲ以テ家庭ノ信用薄ク其ノ言モ亦タ信セラレ
 ズ、胸中ノ不滿沸クガ如ク窃カニ北海道ニ向ツテ逃走セント用意ヲ爲セシ
 モ、脚ノ不自由甚シク先ヅ之ヲ治セント欲シテ兩親ノ許諾ヲ經ズ家ヲ出テ
 テ當院ノ診療ヲ乞フニ至ル

患者ノ嗜好品、幼時ヨリ刺戟強キ物ヲ欲シ甘味ヲ好マズ、喫煙ハ十二歳ヨリ初メ本年春頃ハ一ヶ月平均上等刻煙草四拾目入り四個及卷煙草二、三個ヲ用フト云フ、酒ハ四年前ヨリ飲ミ對酌興味ヲ感セバ知ラズ一升量ヲ傾クコト有リト、茶モ大好物ニシテ一日六、七回交換スルヲ常例トス

現在症 體格中等、榮養ヤ、不長、全身皮膚一般ニ貧血シ、顔貌ハ常ニ多少潮紅ヲ呈シ、眼珠ハ共ニ語ニツレテ移動ス、一見容貌頗ル興奮性ナリ、且ツ常ニ喋言壯語シ殆ンド傍若無人ナリ、頭毛ノ發生、頭蓋、耳翼ノ形狀、瞳孔ノ大サ、角膜反射、舌ノ運動等異狀ヲ見ズ、口腔ハ扁桃腺稍、腫脹シ、咽喉中等度ノ充血ヲ來ス、頸腺ハ左右少シク腫脹セリ、胸部視診上呼吸運動ニ異狀ナク、聽診上右肺炎呼吸音稍、銳利ニシテ「ツベルクリン」反應アリ、心尖大一音稍、亢進ス、腹部ハ異常ヲ見ザルモ只腹筋頗ル過敏ニシテ腹部ノ一部ヲ輕摩スレバ容易ニ全腹筋ノ收縮ヲ喚起スベシ、右脚ハ自覺的ニ疼痛アリト雖他覺的運動ニヨリテ疼痛ヲ見ズ、其ノ他膝蓋腱反射亢進甚シク、足現象 (Fussphänomen)、「アロルノス」腱反射 (Achillessehnenreflex)、「バレンスキー」症狀 (Babinski's Phenomen) 及「アタキシ」 (Ataxie) 等ナシ、今各別ニ概要ヲ述ベシ

運動障礙、麻痺ハ偏癱、單癱、截癱狀等ノ麻痺症狀ヲ見ズ、殊ニ喉頭筋ノ麻痺ハ入院以來見ズ、咽喉食道筋ノ麻痺モ著明ナルコトナシ、膀胱壓縮筋麻痺モ輕度ナル如シ、即チ尿閉ノ傾キアレトモ二日以上ニ渡ルコトナカリキ、其ノ外尿淋瀝ナシ、痙攣ハ屢々事ヲ爲サントスルトキ例ヘバ手指ノ如キ著シク振顫ス即チ注意振顫 (Intentional Zittern) ヲ惹起ス、舌又々挺出セシムル時ニ著シク、其ノ他故意ニ上膊部或ハ大腿部、下眼瞼等ニ之ヲ

起サシムルコト屢々アリキ、或ルトキハ忽チ齒牙ヲ堅ク閉鎖シ所謂「ヒステリー」性牙關緊急ヲ惹起ス、其ノ他甚シキハ實兄ノ來院ガ期日ニ相違シ打電スルモ返信來ラザリシトキノ如キ、床中ニアリテ兩上肢ヲ肘關節ニ於テ堅ク屈曲シ胸側ニ沿ヒテ強直狀ヲ呈セシメ且ツ牙關緊急ヲ起シタルコトアリ、其ノ他項筋ノ強直ヲ來シ談話中突然ニ後頭ヲ以テ椅子又ハ病室ノ壁ニモタレカ、ルコトアリ、又談話中點頭運動ヲ來スコト屢々實見ス

知覺障礙ハ最モ著明ニシテ、咽喉粘膜、懸壜垂ハ全ク知覺脫出セリ、爲メニ喉頭鏡ヲ用ユルコト容易ニシテ喉頭ニハ變狀ヲ見ズ、觸診上右半身殊ニ腰部ハ左側ニ比シテ稍々鈍シ、即チ針尖ヲ以テ身體ノ一部ヲ觸レ其ノ何レノ部ヲ以テ觸レシヤチ問ヒシニ右側ハ左側ニ比シテ答言稍々遲鈍ナリシ、部位神、筋神ニハ變化ナシ、溫神ハ二個ノ硝子管ヲ取り甲ハ冷水ヲ入レ乙ハ中等度ノ温水ヲ盛リ身體ノ各部ヲ檢スルニ、入院當時ハ右半身ハ左側ニ比シテ冷溫ノ差別甚ク困難ニシテ、殊ニ下脚大腿ノ外側ニ於テハ全ク消失セリ、退院前ニハ稍々恢復セシモ右大腿内側ニ於テ依然溫覺脫出ヲ存セリ、痛覺ハ入院當時右半身ハ非常ニ鈍ク、殊ニ腰部及大腿前側上部三分ノ二ニ於テ全ク消失シ、針尖ヲ以テ檢スルモ殆ンド出血スル迄テ穿刺スルモ更ニ疼痛ナシ、入院後約一ヶ月頃此ノ痛覺脫出部ハ漸次後側ニ移行シ退院前ニ在リテハ狹少ノ部分ニ限局シ即チ各臀部脊柱ノ近傍及ビ右大腿中部ノ前後ニ留リテ脫出ヲ存シタリキ

神經痛ハ初メ右坐骨神經ノ經過ニ沿ヒテ來リ、殊ニ股關節附近最モ甚シク、壓痛又々著シキモ、彼ノ坐骨神經痛ノ如ク膝關節ヲ伸展シテ股關節ニ於テ屈折セシムルモ敢テ疼痛ヲ見ズ、此神經痛ハ時々頭痛ト變換シ、患者

常ニ下部ノ疼痛ガ頭中ニ入りタリト云ヘリ、而シテ暗示療法トシテ重曹又ハ乳糖ヲ膠靈ニ容レテ服用セシメ往々該症狀ノ輕快スルヲ認メタリキ、移動法 (Transfert) ニ就イテハ銅板ヲ以テ試ミルニ同側ニ於テ上下シ得シモ他側ニハ移動セシメ得ザリキ

脈管運動神經障礙及分泌性障礙、顔面時々潮紅ヲ來セル外、全身中等度ノ蒼白色ヲ呈シ、兩脚ハ常ニ輕度ノ「チアノーゼ」ヲ來タシ時ニ脈冷ヲ感ジ堪エ得ザルコトアリキ、尿ハ入院以來二日以上ニ渡リテノ尿閉ヲ見ズ、且ツ一回尿量可成大量ナルヲ以テ尿分泌障礙ハ大ナル變化ナキ如シ、比重ハ一〇一五内外ニシテ、蛋白、糖等ナシ、患者ハ屢々水様嘔吐ヲ來シタルコトアルモ、唾液分泌異狀ヲ見ズ、又々入院後喀痰ニ少量ノ血塊ヲ混ジタルコト二三回アリ

發汗ノ多量ニツキテハ常ニ患者ノ訴フル所ニシテ、色汗 (Chromidrosis) 異臭汗 (Osmidrosis) 等ハ無シ

榮養障礙、本患者ニハ殆ンド之ヲ見ズ
 五官器障礙、聽覺ハ健全ニシテ、嗅覺ハ稍々亢進シ、或ル物質例ヘバ上聞ノ際防臭劑ノ臭氣ノ爲メ眩暈ヲ惹起シ用便中途ニシテ出シコトアリキ、味覺ハ時々變化ヲ來シ、食慾モ又々神經性ニ全ク消失シ終日食ヲ口ニセザルアリ、視覺ハ本患者能ク變化ヲ備ヘ、第一回視野試驗ノ際ハ左右眼共ニ一〇度ノ同心性狹少ヲ來シ、第二回ニハ右眼ノミ「アトロピン」ヲ點眼シ瞳孔ノ散大ヲ俟チテ檢セルニ左右同等ニ狹少シテ一〇度以内ニ至レリ、其ノ他近視アレ共、色神ノ變化ナク、眼底検査ニヨルモ器質的變化ヲ發見シ得ズ
 精神障礙、患者甚シク興奮シ易ク、或ハ之ニ反シテ時々極メテ遲鈍トナ

リ、無慾狀ヲ呈ス、甚シキ時ハ精神狀態全ク一變シテ憤怒シ又々時ニ誇大ノ言ヲ吐キ或ハ欺瞞ノ傾向アリ、患者興ニ乘ジテ裸體ノ儘歩行シ他患者ヲ笑ハシメ、甚シキハ患脚ヲ忘レテ飛走スルコト稀レナラズ

結論、以上述べ來リシ事柄ヲ總括スレバ、我が日本ニ於テモ男性「ヒステリー」ハ決シテ我々ノ考フル如ク稀有ナルモノニ非ラズ、唯ダ余ノ報告スル理由ハ症狀ノ極メテ完備シ一點ノ疑ナキモノナルガ故ニ諸君ノ參考ニ供セシニ在リ、殊ニ從來「ヒポコンデリー」及ビ神經衰弱等ノ名義ノ本ニ男性「ヒステリー」ノ含有セラレ居リシコトハ容易ニ考ヘ得ベキ事ヲ信ズレバナリ

終リニ本患者ヲ「デモンストラチオン」スルニ當リ、我が院長ヨリ特ニ多年ノ經驗ヲ分タレ且ツ懇篤ナル校訂ヲ得、一方家坂眼科院長ヨリ視野ニ關シテノ助力ヲ賜ハリタルニ對シ特ニ記シテ滿腔ノ謝意ヲ表ス

